

調査報告

第25次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報

吉村 作治*¹・河合 望*²・近藤 二郎*³・高宮いづみ*⁴
柏木 裕之*⁵・高橋 寿光*⁶・米山 由夏*⁷・石崎 野々花*⁸

Preliminary Report on the Twenty-Fifth Season of the Waseda University Excavations at Northwest Saqqara, 2016

Sakuji Yoshimura*¹, Nozomu Kawai*², Jiro Kondo*³, Izumi Takamiya*⁴
Hiroyuki Kashiwagi*⁵, Kazumitsu Takahashi*⁶, Yuka Yoneyama*⁷, and Nonoka Ishizaki*⁸

Abstract

Waseda University Egyptian Expedition has been excavating at Northwest Saqqara since 1991. The site is located on a prominent rocky outcropping in the desert approximately 1.5 km to the northwest of the Serapeum. Excavations at the summit of the outcropping had revealed a mud-brick structure built by Amenhotep II and Thutmose IV respectively, a monument of Prince Khaemwaset, the fourth son of Ramesses II, and the tomb chapel of Isisnofret, probably a daughter of Prince Khaemwaset. Since the 2014 season, we have continued excavation and conservation at the site, focusing on the areas on the summit of the outcropping previously unexcavated or needs to be reinvestigated.

In this season, our work has concentrated on the three areas within the monument of Khaemwaset: the area at the northern part of the portico, the area to the north and south of the inner chamber, and the area to the west of the inner chamber. In the course of our excavation in the area at the northern part of the portico, we have found an unfinished pit with 1.8 m in length, 1.6 m in width and 1.4 m in depth. Beside the pit, we uncovered a faience shabti. The faience shabti does not seem to have been a part of funerary assemblage, since we didn't find any funerary objects or tombs around the monument, but may have been dedicated to the monument of Khaemwaset for ritual purpose. As a result of our excavation in this season, we could understand how the original ground had been modified for the construction of the monument of Khaemwaset.

* 1 東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授

* 2 金沢大学新学術創成研究機構准教授

* 3 早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長

* 4 近畿大学文芸学部教授

* 5 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

* 6 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員講師

* 7 鶴見大学大学院文学研究科博士後期課程

* 8 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

* 1 *President, Higashinippon International University / Professor Emeritus, Waseda University*

* 2 *Associate Professor, Institute for Frontier Science Initiative, Kanazawa University*

* 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University / Director, Institute of Egyptology, Waseda University*

* 4 *Professor, Faculty of Literature, Arts and Cultural Studies, Kinki University*

* 5 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*

* 6 *Visiting Lecturer, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*

* 7 *Doctoral student, Department of Cultural Properties, Tsurumi University*

* 8 *MA Student, Department of Archaeology, Waseda University*

1. はじめに

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1991年よりエジプト、アブ・シール南丘陵遺跡にて発掘調査および保存修復作業を継続してきた（図1, 2）。丘陵頂部では、これまでに新王国時代第18王朝中期のアメンヘテプ2世とトトメス4世に関連する日乾レンガ遺構、第19王朝のラメセス2世の第4王子、カエムワセトの石造建造物、その娘とみられるイシスネフェルトのトゥーム・チャペルと埋葬室が発見された。第23次調査より、カエムワセトの石造建造物、イシスネフェルトのトゥーム・チャペルとその周辺における人間活動や遺構の構造、建築技法を更に理解するために、丘陵頂部の未発掘区域の発掘調査および既掘区域の再調査を行っており（吉村他 2016a, 2016b）、今次調査においても同様の目的で調査を行った。

調査の期間は、2016年8月8日から30日で、カエムワセトの石造建造物においてトレンチ発掘を実施した¹⁾。1つ目は、ポルティコの北半（トレンチM）、2つ目は奥室の北側（トレンチB）および南側（トレンチN）、3つ目は奥室の西側の2か所（トレンチF、トレンチO）である（図3）²⁾。また、これらの発掘調査と同時にイシスネフェルトの埋葬室において石棺の記録作業も行った。

2. 発掘調査

第23次調査においてカエムワセトの石造建造物の南側の発掘調査を行った際に、地山と盛土、中込の状態を再度確認する必要があると認識されたことから、第24次調査に引き続き、今期の第25次調査でもカエムワセトの石造建造物の精査を（1）ポルティコの北半、（2）奥室の北側および南側、（3）奥室の西側の3か所で行った（図3）。

（1）ポルティコ北半

カエムワセトの石造建造物の正面にあたるポルティコの北半では、これまでの発掘調査によって、柱礎石、床石がすべて失われており、また床下の地業の粗砂の中に石灰岩ブロック（以後、「床下石材」と呼称）が据えられていることが明らかとなった。床下石材は、ポルティコの軸線に沿って据えられていること、ポルティコの石材と類似した「増水期3月19日」と記されたヒエラティック・インスクリプションがあることなどから、ポルティコの建造に伴って据えられたと考えられている。ただし、ポルティコの石材と異なり、モルタルなどが用いられていない点や構造的な役割も不明で、また全面に据えられていないことなどから、ポルティコ建造の計画に組み込まれていた可能性は低いと考えられている（早稲田大学エジプト学研究所編 2006: 30-31, Fig.II-2-20）。このように床下石材の性格については、不明な点が残されていたことから、今期調査において、ポルティコ北半に4.5m×5.5mのトレンチMを設定し（図3）、床下石材の周囲の発掘調査を実施した。なお、これまでの発掘調査では、床下石材の上面でまでの発掘が行われており、今期調査では、床下石材が据えられている地山までの発掘調査を行った。

発掘調査の結果、床下石材の設置状況が明らかとなり、また石材に記されたインスクリプション（図4.6）が発見されるなど、新たなデータを得ることができた。今後、これらのデータを踏まえながら、床下石材の性格について考察を重ねていきたいと考えている。

また、L字状に据えられた床下石材の内側から、未完成のピットが発見された（写真1）。ピット内部には、後世に堆積したと考えられる黄色砂礫層が堆積しており、カエムワセトの石造建造物に由来する石灰岩製レリーフ片が発見された（図4.1-5, 写真2）。また、ピットの脇からは、ファイアンス製のシャブティ（図5.1, 写真3）が発見された。ファイアンス製シャブティは装飾の特徴から第19王朝に年代づけられる。通常、シャブティは墓の副葬品として納められることが多いが、神殿などの建造物などに奉納される場合もある（Pumpenmeier 1998）。これまで石造建造物周辺では埋葬に関する遺物は発見されていないため、このシャ



図1 アブ・シール～サッカラ地図
 Fig.1 Map of Abusir-Saqqara area

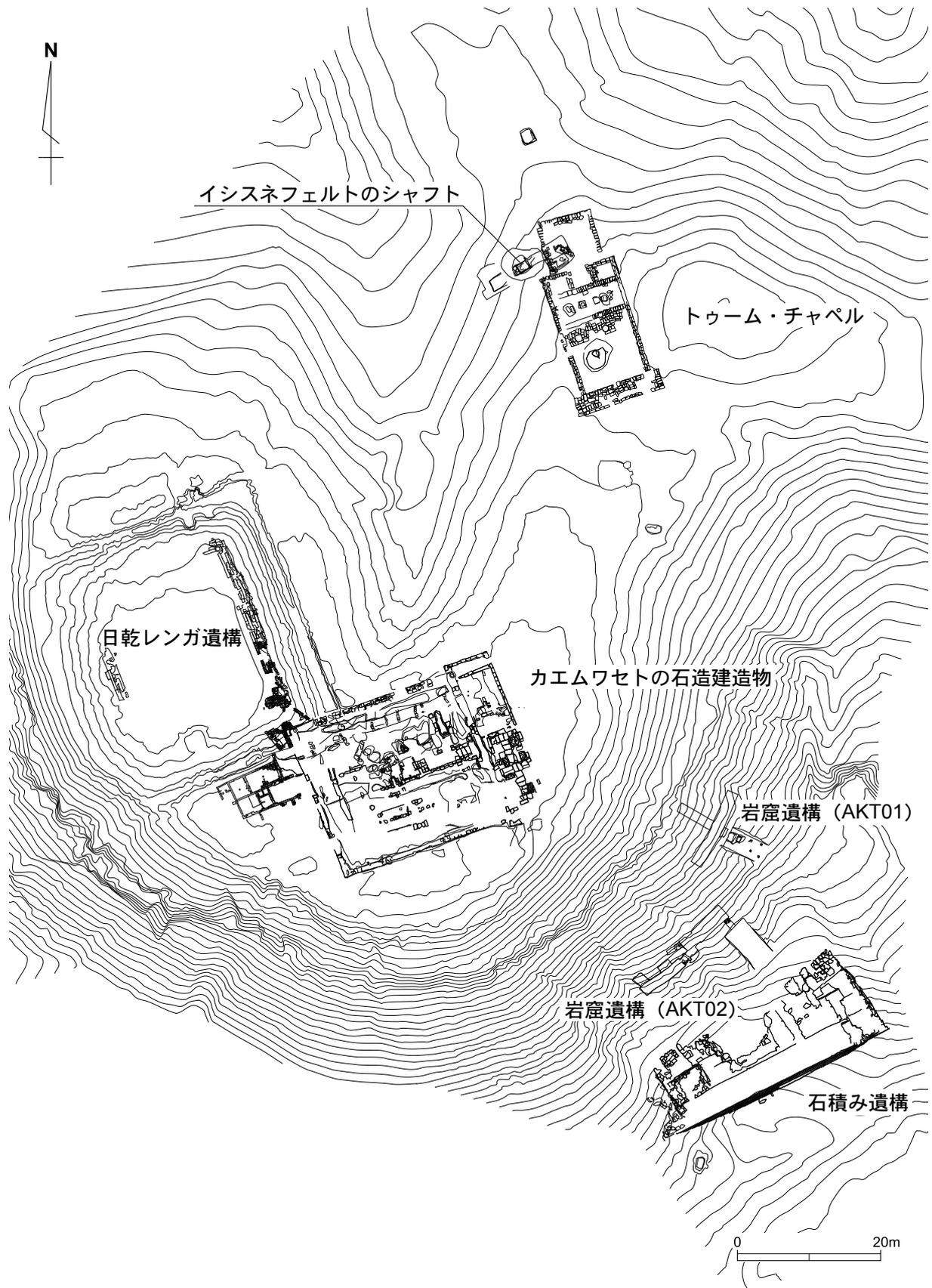


図2 アブ・シール南丘陵遺跡地図
Fig.2 Map of the site

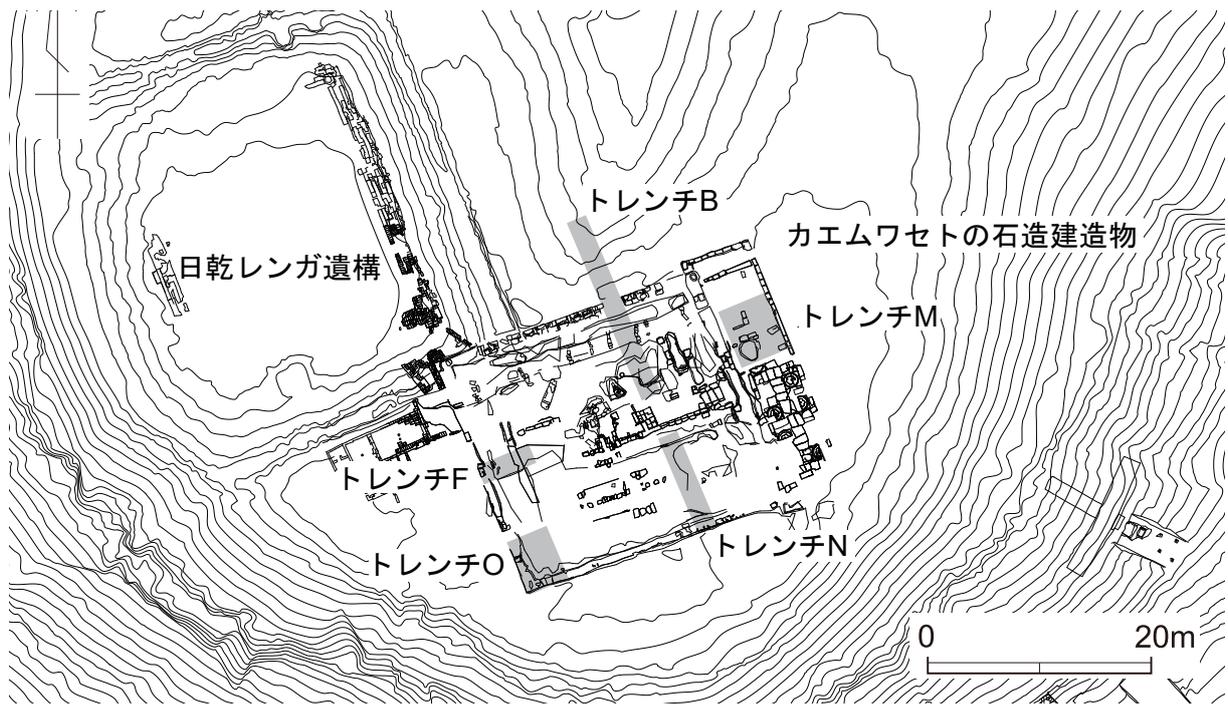


図3 カエムワセトの石造建造物内の発掘区
Fig.3 The excavation area at the monument of Khaemwaset



写真1 ポルティコ北半の未完成のピット、
発掘調査終了後（北より）
Pl.1 An unfinished pit at the northern part of portico
after excavation, looking from north



写真2 カエムワセトの石造建造物に由来する
石灰岩製レリーフ片
Pl.2 A limestone relief block fragment
originated from the monument of Khaemwaset



写真3 未完成のピット脇から発見された
ファイアンス製シャブティと土器片
Pl.3 A faience shabti and fragment of pottery vessel
found beside an unfinished pit

ブティはおそらくカエムワセトの石造建造物に奉献されたものであると推測される。

ピットは、楕円形に近い長さ約1.8m、幅約1.6m、深さ約1.4mであり、未完成で完了している。掘りかけのピット、もしくは盗掘活動に伴って掘られたピットなどの可能性が考えられる。

(2) 奥室北側および南側

これまでの調査において、カエムワセトの石造建造物の精査を行い、有益なデータが得られている（吉村他 2003, 2016a, 2016b）。今期調査でもこれまでの成果を踏まえ、カエムワセト石造建造物の地山と盛土、中込の状態を再度確認するために、奥室北側および南側にそれぞれトレンチ B (2m×17m)、トレンチ N (2m×9m) を設定し（図3）、発掘調査を行った。

発掘調査の結果、奥室北側（トレンチ B）では（写真4左）、これまで地山層と判断していた層から第18王朝に年代づけられる土器片（図5.2）、緑青が付着したフリント石（写真5）³⁾、骨片（写真6）などが出土した。これにより、石造建造物建造以前の地形の状況について明らかにすることができた。また、北側内壁と奥室の間の盛土のトレンチ発掘も行い（写真4右）、盛土に関するデータを得ることができた。

奥室北側（トレンチ N）でも、発掘調査の結果、これまで地山と考えられていた部分が盛土である可能性が指摘された（写真7）。なお、トレンチ内からはヒエラティックが記された石灰岩ブロック片が発見された（図4.7）

このように今期の発掘調査によって、古代の地形や地形改変に関する有益なデータを得ることができた。



写真4 カエムワセトの石造建造物奥室北側、発掘調査終了後（北より）

Pl.4 The excavation area to the north of the inner chamber of the monument of Khaemwaset after excavation, looking from north



写真5 緑青が付着したフリント石
Pl.5 Flint stones which were adhered verdigris



写真6 骨片
Pl.6 Bone



写真7 カエムワセトの石造建造物奥室南側、発掘調査終了後（南より）
Pl.7 The area to the south of the inner chamber of the monument of Khaemwaset after excavation, looking from south

(3) 奥室西側

カエムワセトの石造建造物の奥室西側においても、地山や盛土の状況を確認するために1.8m×5mのトレンチF、4m×5mのトレンチOを設定し（図3）、発掘調査を実施した。

発掘調査の結果、同じく古代の地形やカエムワセト石造建造物造営の際の地形改変に関する有益なデータを得ることができた（写真8）。



写真8 カエムワセトの石造建造物奥室西側、発掘調査終了後（南より）
Pl.8 The area behind the inner chamber of the monument of Khaemwaset after excavation, looking from south

3. 主要出土遺物

(1) 石灰岩製レリーフ片

ポルティコ北半から出土した石灰岩製レリーフ片は5点で、いずれもカエムワセトの石造建造物の壁面を装飾していたものである。図4.1は、「神々の行列」の下のブロック・ボーダーで、奥室の前の前室の壁面装飾の下部を構成するものである（早稲田大学エジプト学研究所編 2001: 188-198）。わずかに人物の足が認められるが、向かい合っている様子が示されており、北壁の一部か南壁の一部かは現在のところ不明である。図4.2も同じく「神々の行列」一部とみられる。右側に神と思われる人物像があり左側を向いている。中央にある垂直線はおそらく人物像が右手で掴んでいるウアス杖の一部と思われる。その前にはヒエログリフで、*d, m3, hr*のサイン記されているが意味は不明である。最後に *h3st*のサインがあるため、外国の地名の可能性が高い。人物像が左側を向いているということは、奥室が左側に位置することになり、このレリーフ片は北壁の一部を構成していたものであることがわかる。図4.3は、垂直の銘文帯で構成される碑文の一部で、おそらく「定礎埋納儀礼」（あるいは「地鎮祭」（Foundation Ritual)）の碑文の一部と推測される。「定礎埋納儀礼」の碑文は、すでに過去の調査で出土しており、ポルティコ由来と考えられている（早稲田大学エジプト学研究所編 2001: 186-187, 292）。図4.4は、図4.2のレリーフ片と同様に左側を向く神と思われる人物像を示したものである。このレリーフ片も、北壁の一部を構成したものと考えられる。図4.5は、右側にカエムワセトが身に纏っていた、プタハ大司祭の典型的な腰布の一部があり、カエムワセトの像の一部と考えられる。垂直線の左側には人物の肩と肘と思われる図像の一部が認められる。これらは、いずれもカエムワセトの石造建造物の壁面装飾を構成していたものであり、これまでに出土したレリーフ片と合わせて場面の復原を試み、改めて報告する。

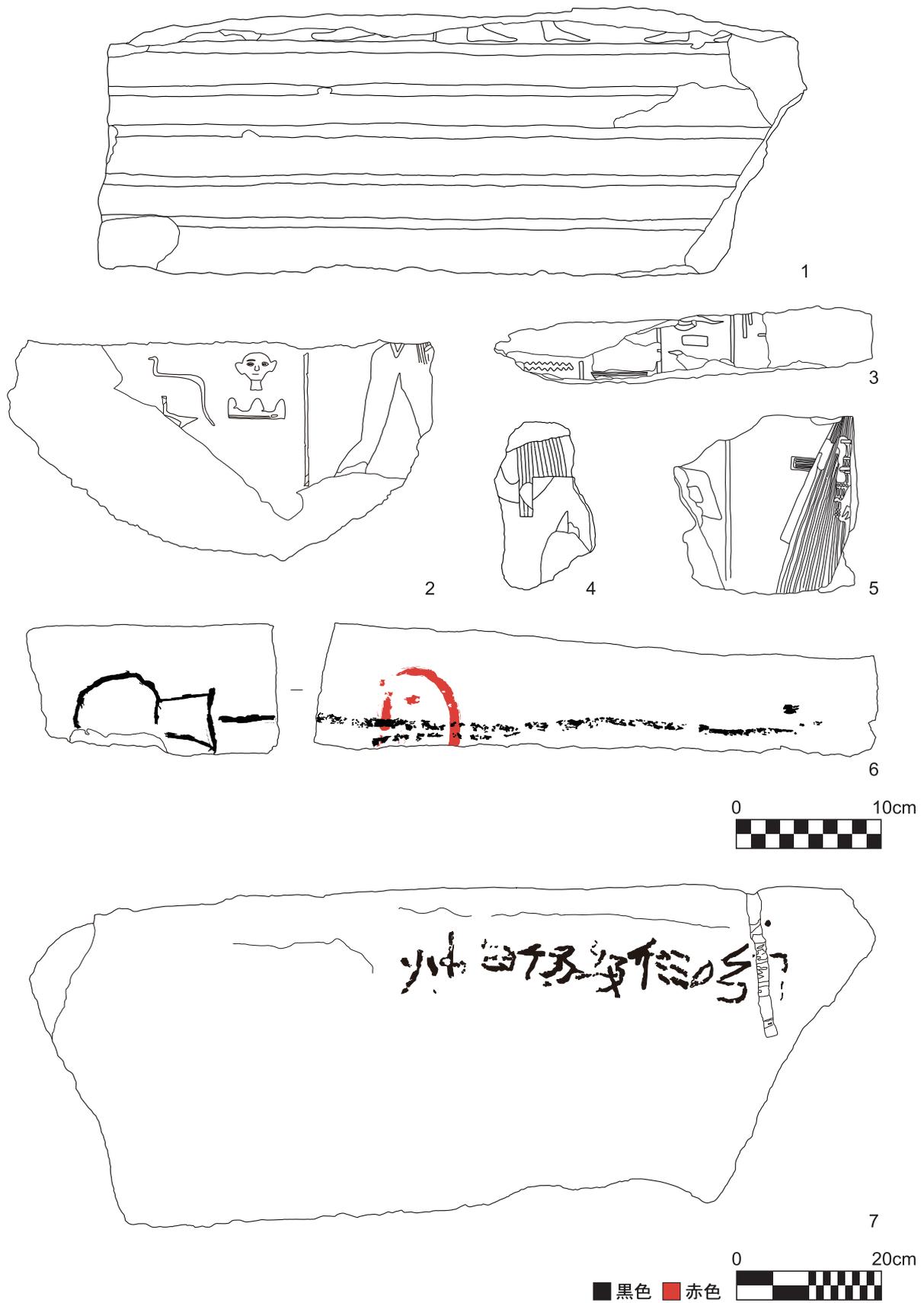


図4 主要出土遺物 (1)
Fig.4 Major finds (1)

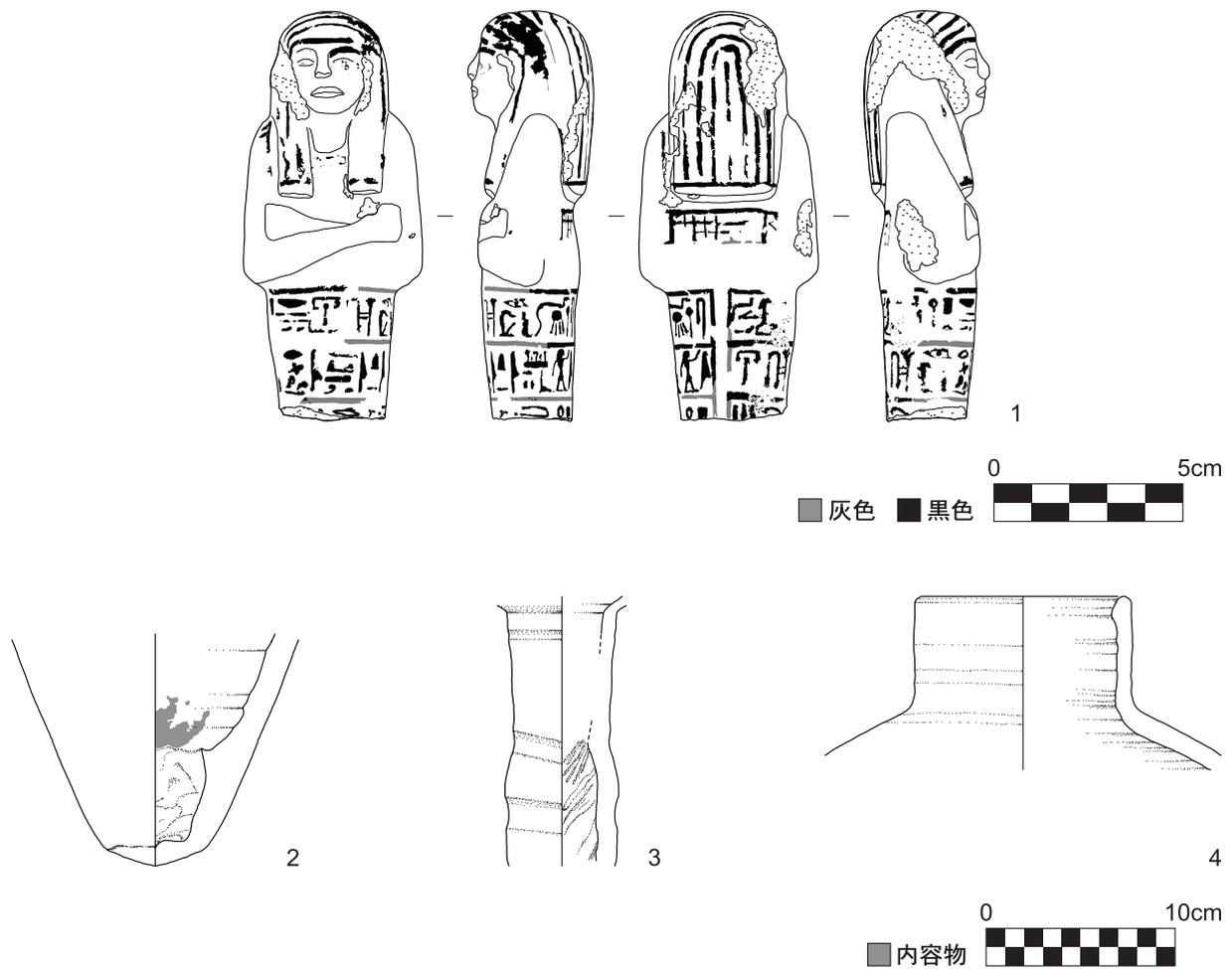


図5 主要出土遺物 (2)
Fig.5 Major finds (2)

(2) ヒエラティック・インスクリプション

ポルティコ北半に据えられた床下石材から、新たにインスクリプションが発見された(図4.6)。赤色と黒色の2種類で書かれており、黒色が赤色の上に書かれていることから、黒色が新しく書かれたと考えられる。黒色のインスクリプションは、壺のマークと直線で構成されており、直線に沿って石材が割られていることから、石材を割る際のガイドラインとして引かれたと考えられる。壺のマークは、当該遺跡の過去の報告書で *krht* マークとも呼称されている(早稲田大学エジプト学研究所編 2001: 307, 309)。ヒエログリフの W-23 の形状をしている。

もう一つのインスクリプションは、*3bd 2 3ht sw 6 wnmw Nht-mnw* 「アケト(増水期)の第2月6日、右班、ナクトミン」と判読でき(図4.7)、これはこれまでも出土したカエムワセトの石造建造物の建設労働者に関する記録と考えられる(早稲田大学エジプト学研究所編 2001: 295-305; 2006: 239-259)。

(3) ファイアンス製シャブティ

今回の調査で初めてカエムワセトの石造建造物内からファイアンス製のシャブティが出土した(図5.1)。アブ・シール南丘陵頂部の発掘においても初めてのことである。寸法は、高さ10.9cm、幅4.7cm、厚さ3.3cmで、ファイアンスは緑色の釉薬を基調とし、黒色で装飾と銘文が描かれている。シャブティは、新王国時代のシャブティに一般的な三裂鬘で、ストライプ状に装飾されている。背中の鬘の下には籠が描かれている。

これらの装飾の特徴から、第19王朝に年代づけられる (Schneider 1977)。銘文は、次のように読める。 *shd wsir sš pr-ḥd n Nb Bwy Pth-m-? dd.f i. sbty ipn ir ip.tw ir* 「オシリス、二国の主の宝庫の書記、プタハエム？を照らすこと。彼は言う、『おお、シャブティよ。もしオシリス [二国の] 宝庫の書記 [プタハエム？] が・・・割り当てられたら・・・』。称号と名前は、「二国の主の宝庫の書記、プタハエム？」とあり、正確な名前は不明であるが、「二国の主の宝庫」とは、王の財務に関わる書記であり、中流の役人とみられる。装飾の特徴から第19王朝に年代づけられるため、カエムワセトと同時代の人物とするとラメセス2世の治世の人物と推定される。シャブティの存在は、付近に同人物の墓の存在が想定されるが、このような称号と名前を持つ人物の墓は今のところ確認されていない。埋葬以外には、シャブティが奉納品として出土している類例もあることから (Pumpenmeier 1998)、このシャブティもカエムワセトの石造建造物に埋納されたものである可能性が推測される。

(4) 土器⁴⁾

今期調査では、主に石造建造物から土器が出土した。石造建造物北側の赤褐色粗砂礫層からは、アンフォラの底部が出土している (図5.2)。アンフォラの類例は、アブ・シール南丘陵遺跡の西側斜面 (吉村他 2007: Fig.22.3) やチャヌニ墓 (Brack and Brack 1977: Taf.63.nos.2/28, 29) などであり、新王国時代第18王朝中期に年代付けられる。

石造建造物の内壁盛土の発掘では、上層の赤褐色粗砂礫層から器台が出土した (図5.3)。類似した器台は、これまでの石造建造物における発掘調査でも出土している (早稲田大学エジプト学研究所編 2001: Fig.VI-2-2.40; 吉村他 2003: Fig.12.1)。特に赤色花崗岩製の偽扉の背後 (西側) から、ミニチュア土器や石製品などとともに集中して出土したことから、鎮壇具の一部と考えられている (吉村他 2003: 13, 19)。こうした点から、器台が出土した層は、偽扉周辺の盗掘の際の排土の可能性が考えられる。

石造建造物のポルティコにおける発掘調査では、シャブティの脇から、壺形土器が出土した (図5.4)。ただし、これらは攪乱層から出土しており、両者の関係は不明である。アブ・シール南丘陵遺跡 (早稲田大学エジプト学研究所編 2001: Fig.VI-2-7.9; Fig.IV-4-17.11) やエレファンティネ (Aston 1999: Pl.20.nos.584, 585) などの類例から、第3中間期から末期王朝時代に年代付けられる。

4. イシスネフェルトの石棺の調査

イシスネフェルトの石棺は、埋葬室の南西隅の掘り込み内に位置しており、これまで西面と南面の観察、記録、保存修復ができない状態であった。これを改善すべく、第23次調査および第24次調査において、石棺を埋葬室中央に移動する作業を行った (荻谷他 2016)。

第24次調査で移動が完了したことを受けて、今期調査ではこれまで見ていなかった西面と南面の観察および記録作業を行った。記録に際しては、透明フィルムを用いたのトレースと SfM (Structure from Motion) 技術を用いた3次元モデルの作成を行った⁵⁾。

5 まとめ

今期調査では、カエムワセトの石造建造物の構造や建築に関するデータを得る目的で、トレンチを設定し、発掘調査を実施した。発掘調査の結果、古代の地形や地形改変に関する有益なデータを得ることができた。今後、これらのデータを含め、カエムワセトの石造建造物の建造に関する考察を重ねていきたいと考えている。また、カエムワセトの石造建造物に奉納されたと考えられるファイアンス製シャブティも発見され、石造建造物における活動の一端を新たに明らかにすることができた。また、イシスネフェルトの石棺について

も、これまで見ることでできなかった西面と南面の観察、記録を行うことができ、有益なデータを得ることができた。

謝辞

本調査は、本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A）（課題番号：26257010 研究代表者：吉村作治）、基盤研究（B）（課題番号：15H05163 研究代表者：河合 望）、住友財団海外の文化財維持・修復助成などの助成を受けて実施された。

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣マムドゥーフ・アル＝ダマディ閣下（博士）、外国調査隊管轄事務局長ハニー・アブー・アル＝アズーム氏、サッカー査察局長アラ・アル＝シャハータ氏、同副局長サブリー・ファラグ氏、チーフ・インスペクターのムハンマド・ユーセフ氏およびハムディ・アミン氏、サッカーのセリーム・ハッサン遺物収蔵庫の館長ラガブ・トゥルキ氏、我々の調査の査察官ムハンマド・シャバーン・アブド・アル＝ザーヘル氏を始めとする多大なご協力を頂いた（肩書きは調査時のもの）。カイロでは、早稲田大学エジプト学研究所カイロ・オフィスの吉村龍人氏、ムハンマド・アシュリー氏に考古省との渉外などで大変お世話になった。

ここに記して感謝の意を表する。

註

- 1) 調査の参加者は以下の通りである。考古班：吉村作治、近藤二郎、高宮いづみ、河合 望、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、建築班：柏木裕之、測量・探査班：三井 猛、梅田由子、現地渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 2) トレンチの名称について、トレンチ B、トレンチ F については、第 10 次調査におけるカエムワセト石造建造物のトレンチ発掘と同じ場所であるため、そのまま名称を用いた（吉村他 2003: Fig.4, Table 1）。また、トレンチ M、N、O については、新しく名称を付した。
- 3) フリント石に付着した緑青を観察したところ、こすれたような痕が見られた。また、約 5cm の小型のフリント石から約 20cm の大型のフリント石まで緑青が観察された。こうした点から、これらは青銅製のノミを打ち付ける側のハンマーとして使用されたのではなく、地山に溝などを掘削する際に、ノミが打ち付けられ、こすれた結果、緑青が付着したと判断された。
- 4) 土器の胎土に関しては 10 倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った（Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130-132）。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した（Aston 1998: 41-51）。
- 5) SfM (Structure from Motion) 技術を用いた 3 次元モデルの作成は、(有) 三井考測の三井 猛、梅田由子によって行われた。

参考文献

Aston, D.A.

1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. Teil 1. Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.

1999 *Elephantine XIX, Pottery from the Late New Kingdom to the Early Ptolemaic Period*, AVDAIK 95, Mainz am Rhein.

Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.

2000 "Pottery", in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121-147.

Brack, A. and Brack, A.

1977 *Das Grab des Tjanuni: Theben Nr.74*, Mainz am Rhein.

Nordström, H-Å and Bourriau, J.

1993 "Ceramic Technology: Clays and Fabrics", in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143-190.

Pumpenmeier, F.

1998 *Eine Gunstgabe von seiten des Königs: Ein extrasepulkrates Schabtidapot Qen-Amuns in Abydos, Studien zur Archäologie und Geschichte Altägyptens* 19, Heidelberg.

Schneider, H.D.

1977 *Shabtis*, 3 vols, Leiden.

菊谷浩子、柏木裕之、高橋寿光、河合 望、吉村作治

2016 「アブ・シール南丘陵遺跡第23次・第24次調査保存修復作業」、『エジプト学研究』第22号、早稲田大学エジプト学会、pp.41-50.

吉村作治、近藤二郎、河合 望、柏木裕之、西坂朗子、高橋寿光、矢澤 健

2007 「III. 発掘調査概要」、『エジプト学研究』別冊第11号、早稲田大学エジプト学会、pp.33-58.

吉村作治、河合 望、近藤二郎、高宮いづみ、高橋寿光、竹野内恵太、山崎美奈子、福田莉紗

2016a 「第23次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第22号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-28.

吉村作治、河合 望、近藤二郎、高宮いづみ、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、松永修平、山崎世理愛

2016b 「第24次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第22号、早稲田大学エジプト学会、pp.29-40.

吉村作治、長谷川奏、菊地敬夫、河合 望、西坂朗子

2003 「考古班報告」、『エジプト学研究』別冊第6号、早稲田大学エジプト学会、pp.11-28.

早稲田大学エジプト学研究所編

2001 『アブ・シール南〔I〕』、鶴山堂.

2006 『アブ・シール南〔II〕』、Akht Press.

エジプト学研究 第23号

2017年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.23

Published date: 31 March 2017

Published by The Japan Egyptological Society

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Egyptological Society